

第十九巻：奥山の八峯の椿つばらかに

原文：奥山之 八峯乃海石榴 都婆良可尔 今日者久良佐祢 大夫之徒

作者：大伴家持(おおとものやかもち)

よみ：奥山の八峯(やつを)の椿つばらかに、今日は暮らさね、大夫(ますらを)のとも

意味：今日は心ゆくまで楽しい一日を過ごしてください、ますらおたち。大伴家持(おおとものやかもち)の館で催された宴会での歌です。「奥山の」から前半は、「つばらかに(十分に、思い残すことなく)」を導入するための句です。



つばらか
都波良可椿
2013年 自然実生
(親不明)



「香椿(チャンチン)」
中国語 センダン科植物

ツバキは『万葉集』に九首みられますが、「椿」だけではなく「海石榴」「都婆伎」「都婆吉」とも記されています。「椿」と表記する植物は中国にもありますが、実はまったくの別物です。

「海石榴」をツバキとよむのは不思議に思われるかもしれませんが、『万葉集』に「八峯乃海石榴(やつをのつばき)」(巻十九の四一五二)と「夜都乎乃都婆吉(やつをのつばき)」(巻二十の四四八一)とあり、どちらも八峯(やつを)のツバキを指すことから両者の比較によって「海石榴」がツバキであることがわかります。
(本文 奈良県万葉文化館 小倉 久美子)

第十九巻：わが背子と手携はりてあけ来れば

原文：和我勢故等 手携而 晓来者 出立向 暮去者 授放見都追 念暢 見奈疑之山尔
八峯尔波 霞多奈婢伎 谿敞尔波 海石榴花咲 宇良悲 春之過者 霍公鳥 伊也之伎
喧奴 獨耳 聞婆不怜毛 君与吾 隔而戀流 利波山 飛超去而 明立者 松之狭枝尔 暮
去者 向月而 菖蒲 玉貫麻泥尔 鳴等余米 安寐不令宿 君乎奈夜麻勢

作者：不明

よみ：わが背子と手携(たづさ)はりてあけ来れば出で立ち向かひ、夕さればふり放け見つつ思い暢(の)べ、見和ぎし山に八峯(やつを)には霞たなびき、谷べには椿花咲き、うら悲し春の過ぐればホトギスイやしき鳴きぬ、独りのみ聞けばさびしむ、君とわれ隔てて恋ふる砺波山(とみやま)飛び越えゆきて、明けたたば松のさ枝に、夕さらば月に向かひて、菖蒲(あやめぐさ)玉貫(ぬ)くまでに鳴きとよめ、安寐(いね)しめず君を悩ませ

意味：あの人と手をとりあって夜明けを迎えたならば家を出てその山に向かい、夕暮れになると山を見て心を和らげ、山の峰には霞がたなびき、谷には椿が咲き、春が過ぎるとホトギスがしきりに鳴き、独りでそれを聞けばさびしい。ホトギスさん、あの人と私とを隔てている砺波山を飛び越えて、朝には松の枝に、夕暮れには月に向かつて、あやめぐさが咲くまで鳴き立てて、あの人を眠らせないで。



せこ
勢故椿
2013年自然実生
(親不明)



あけき
晓来椿
年不詳自家自然実生
(曙?)

ツバキは日本原産の植物です。油がとれることは良く知られています。黒くツルツルとした果実が熟すと三つ四つに裂け、中から褐色の種子がでてきます。この種子から油を搾り出すことができるのです。

かつて遣唐使はこの油をもって渡海しました。中国において海という字がつく植物は海外からもたらされたものを指すことが多いため、もしかすると「海石榴」という表記は中国でつくられたのかもしれない。

歌にある「つらつら椿」は、『万葉集』本文では「列と椿」となっています。葉と葉の間からツバキの花が連なったように咲いているのが見えるようすをいっているのでしょう。まるでツバキの連なりを楽しむような、とてもリズムの良い一首です。
(本文 奈良県万葉文化館 小倉 久美子)



県民だより奈良(平成26年12月号)